



Title	<書評>『闘う男たち』（毎日新聞社神戸支局編著, 世界文化社）
Author(s)	柚本, 裕美
Citation	大阪公衆衛生. 1994, 65, p. 14-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83815
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

世界に通用するラグビーを合言葉に掲げる姿勢がチームを強くしている。

(東大阪市健康づくり推進室 柚本裕美)

『闘う男たち』

毎日新聞社神戸支局編著
世界文化社

平成6年1月8日、第46回全国社会人ラグビー大会決勝の日、花園ラグビー場のメインスタンドで1時間以上も前から試合が始まるのを私は、待っていた。

私は、学生時代、社会人を通じて、サッカーを続けているが、この時期、ラグビーは、見逃せない。その魅力にとりつかれて、今年も観戦に来たのだった。最大の焦点は、「神戸製鋼の6連覇なるか」であった。

「闘う男たち」は、神戸製鋼ラグビー部が、4年連続日本一になった2年前のシーズンを丹念に追ったものである。

神戸製鋼の強さの秘密は、チーム内での激しいポジション争いである。自分が不調ならば、すぐに誰かにとってかわられてしまう。この緊張感が、全体のレベルアップにつながっている。先輩の技と奥深い理論にひかれ、ラグビーにとりつかれていく。

センターの加藤尋久が、「パスは腰を入れるな」と注意されたが、面喰らう場面がある。「加藤のそれまでの7年間のラグビー生活の中で手の動きと踏み出す足は、決まっていた。

突然、『腰を入れるな』といわれても、しみついた習慣は、簡単にかえられない。(中略)腰を入れた方が、パスは、伸びる。しかし、試合ではパスをする度に足を合わせてはいられない」。神戸製鋼ラグビーの革新性を示すエピソードだが、先輩が後輩に対し手取り足取りの指導は、しない。必死になって先輩の技を盗むのである。この厳しさに加え、